

大草原の真ん中に突然現れるチベット版西部劇の町、塔公。この旅の間中、ずっと再訪を楽しみにしていた土地に到着した私は、弾む気持ちでバスを降りると、スキップでもしたい気分で通りを歩き出したが、直ぐに、あれえ・・・？と肩透かしをくらったような気持ちに包まれはじめた。町の様子はどうも思い描いていたものとは違っているようなのだ。

ほんの一月前に訪れたあの日、真夏の陽射しの下、天空のカウボーイ達の憩いの場として活気に満ち溢れていた町が目抜き通りは、白い昼間の光に照らされガラーンとしているばかりだった。町を横切る人影も少ない白けた空気の中、到着早々に感じ始めている期待が外れた違和感に、どう自分の気持ちに折り合いをつけたらいいのか戸惑いながら、とりあえずいつものように、この町での落ち着き場所を探す事にした。

知らない町での宿探しは「招待所」の看板を掲げている建物を適当に物色し、部屋を見せて貰って料金と部屋の設備に納得したらそこに決めるのが常だが、宿探しの為に歩き回るのが面倒な私はさほど設備にはこだわらず、大抵1軒目の宿に落ちてしまう事が多い。なのに、何故かこの日に限ってそれすらもスムーズには進まなかった。訪れた宿が留守だったり、部屋の日当たりが悪く湿っぽい雰囲気が入らなかつたりと、なかなか落ち着き場所が決まらない。

塔公の表通りは端から端まで歩いて数百メートル位のものだ。人通りも少ない道で何度も同じ場所を行ったりきたりしているうちに、どんどん気持ちが沈んでくる。この町を訪れたのは間違いだったの？ あの日に見た活気に溢れていた塔公は幻だったのだろうか？

一つだけ思い当たる事といえば、町の活気に変化があるのは季節の関係ではないかと思われた。

このカム地方の高原では毎年夏になると、長年馬を駆り生活してきた遊牧民達の400年もの伝統に基づいた、盛大な競馬祭が草原のあちこちで催されるのだそうだ。晴れの舞台で華やかな民族衣装を身に纏った腕自慢の男達が、勇壮で華麗な乗馬の技術を競い合い、民族舞踊が舞われ、歌や芝居が披露され、彼らの文化に基づいた様々な競技が繰広げられる盛大なお祭りが一週間から10日程も続くのだという。普段は家族単位で大草原に散り散りに暮らしている遊牧民達も、この時期になると一斉に

祭りが行われる土地に集まってくるため、競馬祭が行われる草原の周辺には、その時だけ遊牧民達の巨大なテント村が現れるのだそうだ。きっとそんな祭りの場が若い男女の出会いのチャンスともなるのだろう。私が写真でしか見たことのない、祭りの日の遊牧民男女は、誰もがこの日とばかりに気合の入ったお洒落を決めて、頭の先からつま先までそれはそれは豪華絢爛だった。

そんな夏の競馬祭は理塘で行われるものが最も規模が大きく有名だが、塔公も競馬祭が行われる土地なのだそうだ。きっと私が前回に訪れた頃は、競馬祭に集まった遊牧民達がまた町の周辺に居残っており、祭りの余韻で町が沸き立っていた時期だったのではないだろうか。

そう思えば、あの時には町の外に広がる草原にいくつか立っているのが見えていた、遊牧民達のテントがすっかり無くなっている事や、あのどこか尋常ではないように思えた程の町の活気も、祭りの興奮の余韻と思えば合点が行った。きっとあの日この町に集まっていた彼らは、再び大草原の彼方此方へと立去ってしまった後なのだ。

あまりに大きかった期待が外れた落胆に力が抜けてしまい、当てなく町を歩くことにも疲れてしまった。朝から何も食べて無いのでお腹も空いてきたし、宿探しは後回しにしてまず食事をとる事にしたのだが、またしても困った事には、この町には私が一人で簡単な食事を取れる様な、手頃な店など殆ど存在していない様子なのだ。

しばらく歩き回った末、漢民族とおぼしきおじさんがやっている汚く寂れた麺屋を見つけると、店頭で湯気を上げていた麺を茹でる為の大鍋を指差して温かい麺を注文した。麺が出てくるのを待つ間、当初の旅行メンバーとこの町を訪れた際に案内人の大川氏が、この町の食べ物は不味いと話していたのが思い出されたが、案の定出てきた麺は全然美味しくなかった。残り僅かな貴重な旅の時間を、なぜこんなつまらない場所にやってきてしまったんだろう……。先ほどから考えまいと努力していたが、ついにそんな気持ちがにじみ出てきて、なんだか泣きたい気分になった。

しかし僻地の旅の食事など、食べられるだけ有難いという場面は良くある事で、旅の食事に関してはさほどクオリティに拘らない私は、とりあえずお腹が満たされてしまい、寂れた麺屋の片隅でくつろいでいるうちに、すべての事がまあいいやと思えてきた。

何も無いチベットの町の片隅で何もせずにボンヤリするのも、私らしい旅の過ごし方じゃないか。とにかく此処まで来てしまったからには、この町に居ることを楽しまなくては損だ。今日がどうにもつまらなかったら明日康定に戻り、また別の場所に行く事だってできる。麵屋を出ると再び宿探しに通りを歩き、先ほどは入り口が門の中にある為に、入りづらくて避けていた宿を覗いていると、丁度中から出てきた男が、部屋を見てくれと私を宿の中に招き入れた。

案内された宿の2階は誰もお客がいないようでガランとしていたが、どの部屋も日当たりが良く、窓から見える景色が綺麗だ。悪くないな・・・とっていると、男がこれまでの宿泊客の感想ノートを持ってきて、私に読んでくれと差し出した。開かれていたページには過去にこの宿に泊まった日本人が、宿については褒めもけなしもしないが、宿の主人は悪い人間では無いと思う、という宣伝になっているのか、いないのか判らないような文章が書かれており、それを嬉しそうに私に読ませている主人が可笑しくて、私はこの宿に泊まる事にした。

部屋の窓からはこの町の神山が真正面に見えていて美しかった。気に入った落ち着いた先が見つかった事で気持ちにゆとりができたのか、少し楽しい気分になってきていた。

さてこれからどうしよう・・・

なにせ塔公の町など小さいので、先ほどの宿探しだけで、ほぼ町中を歩いてしまったようなものだ。今から再び町に出ても退屈なだけのような気がしたが、実はこの町に関しては事前にほんのちょっぴり情報も入手していた。まだピサ延長で成都のゲストハウスに滞在していた際、宿で親しくなった日本人が中国のチベットエリアに関するガイドブックのような本を持っていて、その時から塔公は必ず訪れると決めていた私は、そこにごく簡単に載せられていた塔公の町の紹介ページを、ちゃっかりコピーさせて貰っていたのだ。

ザックからコピー用紙を取りだし改めて眺めると、町の裏手から徒歩で30分程の場所には僧院があり、その近くにはマニ石を積み上げた巨大な塚があると記されていた。他に行く当ても無かったし、これまでの道中の出来事や理塘で不思議な縁を感じるマニ石と出会った事などで、それらの仏教的なものへ惹きつけられる気持ちの強まっていた私は、この僧院まで散歩してマニ石を見に行くことに決め、宿を出た。

目抜き通りから路地を折れて町の裏手に入ってみると、意外にもそれまで奥行きが無いように感じられていたこの町にも、規模は小さいが住宅地のような場所が広がっていた。遊牧民達が居なくなってしまうと、生活感のあまり感じられない町の様子は魅力に乏しいように思っていたが、裏手に回ればちゃんとこういう場所もあったのだ。そんな新しい発見を楽しみながら田舎道をのんびりブラブラ歩いているうちに、私の部屋からも眺められていた神山の山すそに何か建物が建てられているのが見えてきた。地図などいい加減にしか見ていなかった私は、あれだあれだとそちらに向かって歩いて行っていたが、辿り着いてみればそれは単なる庵のような物で、考えてみれば僧院がそんなに小さい訳など無いのだった。

目的地にさほどの執着もなかったし、戻るのも面倒だった私はそのまま引き返さずに散歩を続けることにした。神山の山肌には道など無かったが標高が高い為、樹木が生えず、傾斜も緩やかなこの辺りの山は、歩きたければ何処でも歩ける。動物の踏み跡のような筋が山肌にいくつも付いていて歩きやすかった事もあり、田舎道の散歩の筈だったのが、いつの間にか道を逸れて山の懐に入り込んでいた私は、なんともピクニックに最適な雰囲気の良い美しい牧草がびっしりと茂った神山の麓に辿り着いた。

うわぁ～～きれいな場所！お弁当を持っていないのが残念な気分だ。こんな場所で昼寝をしたり読書したりして過ごすのも悪くないな・・・そんな事を思いながら、目の前に聳えている神山を見上げていた。山といっても高さはさほどでもなく、散歩を兼ねた遊びでちょっと登ってみるには丁度良い感じに見えた。このまま町に戻ってもやる事など思いつかないし、この山の上からどんな景色が見えるのか眺めてみたい。

急にそんな気持ちが湧いてきた私は、ごく軽い気持ちで目の前の斜面を登り始めていた。

軽い気持ちで登り始めてみたものの、この登山は思ったよりキツかった。まずなんといっても空気が薄い。そして暑い！

塔公は標高3700メートル程の場所にある土地で、これまでの旅路で高度順応してるとはいえ、やはり私の身体は悲しい下界人なのだ。そんな天空に近い場所で受ける太陽の光は、下界より距離が近い分だけジリジリと強烈で、山全体が草に覆われただけの斜面では逃げ場となる日陰も無い。しかも麓からは山頂のように見えていた

場所は、そこに辿り着いてみればまだまだ先があり、軽い散歩のつもりで宿を出た筈だったのに、いつの間にか結構な登山となっている。

いったい何故ここでこんな事やってるの〜っ!? 大汗をかきながら自問自答し、それでもハァハァと息を切らしながら登っているうち、とうとう石を積んで作った仏塔が建てられているのが見えてきて、やっと山頂に辿り着いた。

これまで登ってきた方向を振り返れば眼下には小さな塔公の町が箱庭のように見えている。神山である山の山頂に立ち、自分が神様の目線と同じ高さで、下界を見下ろしていると思うといい気分だ。

草原の向こうには塔公の景色を象徴し、土地の者が神と崇める雪山、雅拉(ジャラー)神山(5820 m)が天を突いて聳えているのが見えていた。眺める者に有無を言わさず神の存在を認めさせる圧倒的な迫力と存在感に満ちている素晴らしい雪山に鳥肌の立つ思いだ。地平線の向こうには真っ青な空を背景に、他にも私が名前を知らない白い峰峰の連なりが浮かんでいるのが眺められた。単なる思い付きで登っただけだったのにこんな素晴らしい景色が見られるなんて、この思わぬ登山は大正解だ。

それじゃあ反対側には何が見えるの? 山頂から山の向こう側が見渡せる場所まで歩いていくと、そこに見えた景色は大草原の広がる片側の風景とは違って変わって、低い山々がいくつも重なりあって連なる丘陵地帯となっていた。そしてそんな山間にもポツリ、ポツリと家が建つ小さな小さな村があり、そこにお寺が建てられているのが見えていた。

こんな大草原の真ん中にポツンと存在する塔公の、更にその奥にも人が暮らしている場所があったのだ。それがなんだか不思議に思えた。山の上から眺められるお寺は太陽の光を受けて金色に輝いて見えていた。村の規模や立地に対してずいぶん立派なものに感じられ、それが土地の人々の信仰心の強さを物語っているようにも思われて、そのお寺にはなんだか妙に惹きつけられた。

あそこに行って見たいな……。

はじめのうち、それは叶わない願望として頭に思い浮かんだだけだった。交通の便も無いように思える奥の村へ、土地の人間ではない自分が行く事など

出来ないと思えていたのだ。

だが、山の上から見渡せる丘陵地帯の風景の中で、ひと際存在感が感じられるお寺は、肉眼でハッキリ見える距離にあり、これまでの旅の間中どこの土地でも普通の人が車や馬で移動する場所を殆ど歩いて済ませていた私だ。

私の立っている山の上からお寺までの間は草に覆われた土地が続いているだけで、進路をさえぎるような物はない。このまま山を向こう側に下って、ひらすらお寺をめざして歩いていけば簡単に辿り着けそうな気がしてきた。

……じゃあ、行って見ようじゃないの!

そうして私は今日という日の過ごし方に、新しい目標を見つけてしまったのだ。(次号に続く)(続く)